

会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開および委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会議名	第1回高松市コンパクト・エコシティ推進会議
開催日時	平成23年8月2日(火) 10時00分～12時20分
開催場所	高松市役所11階 114会議室
議 題	・ 会長の選任について ・ 高松市コンパクト・エコシティ推進計画について ・ その他
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	—
出席委員	嘉門会長，大谷委員，高塚委員，土井委員，竹内委員，古川委員，松野委員，辻委員，坂本委員，宮崎委員，柘植委員，中橋委員，小西委員，高尾委員，松岡委員 (欠席委員なし)
傍聴者	1人(定員20名)
担当課および連絡先	都市計画課コンパクト・エコシティ推進室 087-839-2456

会議経過および会議結果

会議を開会し、次の議題について協議し、下記の結果となった。

(1) 会長の互選，会長代理の指名および会議の公開について

高松市コンパクト・エコシティ推進会議設置要綱第4条第1項の規定により，委員の互選により，嘉門委員が会長に選任された。

会長は，同要綱第4条第2項の規定により，土井委員を会長代理に指名した。

また，会長から，本日ならびに今後の会議について，原則，公開とすることが提案され，委員全員がこれを了とした。

(2) コンパクト・エコシティ推進計画について

コンパクト・エコシティ推進計画について，資料1に基づき，事務局より説明し，次のとおり意見があった。

(会長)

上位計画の都市計画マスタープランの目標年次は，17年後の平成40年であり，コンパクト・エコシティ推進計画で考える30年後ではない。どのように考えるのか。

(事務局)

コンパクト・エコシティ推進計画は，20～30年後の将来を見据えたものであるが，

審議経過および審議結果

17年後を目標年次とした都市計画マスタープランとの整合性を持たせる必要があるものとして考えていただきたい。

(会長)

富山市などでは、JRと地方鉄道線をつないだLR Tが、港の開発等も含めて整備され、その周辺に高齢者も集まって、コンパクトなまちづくりが進んでいる。

高松市では、中心部にJR、琴電、バスが錯綜しており、道路も複雑であるため、交通体系を考える上で、歩行者をどう守っていくかが重要になるだろう。

(委員)

生産年齢人口の減少と女性の社会進出などから、これまで地域を支えていた人たちの層が薄くなっている。地域の中で、つながり感や、誰かと関わり、役に立つことを感じるには、一定の密度のあるまちづくりが必要で、コンパクト・エコシティを進めることは大切なことである。様々な人たちの拠り所となるような場所が、まちの中の歩いて行ける距離にできればいい。まちに愛着を感じ、人とのつながりが見えるためには、そのための場所が必要と思うので、場所づくりも考えていくことができればと思う。

県立中央病院の移転計画があるが、それら施設との連携や関連性も重要になる。

将来のまちづくりなので、子どもたちの意見も重要であり、子どもたちをどう教育していくかも重要である。

(委員)

今の子どもたちは、行く場所がなく、親子でじっとマンションの中にいることが多い。

高齢者も、身内は郊外に住んでおり、1人暮らし、あるいは老夫婦暮らしという中で、少し体調が悪くなった場合には、大きな県立病院などには行きにくい。動くのが大変な時でも、近所の小さな町医者では入院できず、通院しなければならない。小さな町医者に一晩でも二晩でも泊まれるような設備を整えることはできないか。また、近くに買い物ができる場所もなく、高齢者が生活できるような状況を考えていただければ幸いである。

(会長)

全国で1,500万戸以上の空き家があり、国土交通省もリフォームや再利用のマーケットを増やそうと支援している。ここで交流の場が作られ、市民の活動として、地域ごとに取り組むことができたらいいいのではないかと思う。

(委員)

どうしても若者は仕事のあるところに行ってしまう。また、郊外は土地が安く、自動車さえあれば幸せな生活ができるということから、自然な流れとして郊外に行く。

空き家をどのように活用するかは、家主の立場から考えるとリスクの高い投資だと思う。いかにリスクを低くして実現できるか、私の会社で、実験的にシェアオフィスを立ち上げてみたが、リスクばかりで会社にはメリットがない。ただ、気付いたことは、市民の中に潜在的に同じような考えを持つ人がいるということで、少し旗を振ると集まってきたということである。

今後は、お金をかけず、ハード整備を行わずに、まちづくりを考えなければならない。

(委員)

審議経過および審議結果

今後、推進会議を進めるに当たり、誰をターゲットにするかによって、意見も、求めることも大きく変わってくる。何か、柱というか、ポイントを共有した方が、議論が進むのではないか。この会議のゴールイメージを具体的に確認したい。

(事務局)

ターゲットを絞りたいが、様々な視点がある。若い世代が郊外へ行ってしまうのが1つの特徴であるが、高齢者の単身世帯も増えている。余剰住宅がある一方で、若い世代は、郊外の田畑を潰して、家を新築している。

子育て世代や高齢者がターゲットになると思うが、幅広い視点からご意見をいただきたい。

(委員)

4回の会議開催の成果として、何か1つでもアクションを起こすよう、市に求めたい。

例えば、コンパクト・エコシティを目指すということであれば、中心市街地には生鮮品を買えるところが少ないので、高松市の公設市場を設置し、市が運営するというのをしてもいいのではないかと考えている。

(事務局)

今までできなかったもので、これからもできないということではなく、集約型のまちづくりに向けての発想の転換が必要と考えている。

(委員)

委員の間でも、ゴールイメージがずれていると感じる。集約化を目指すのがゴールなのか。集約化だけであれば、このまちは壊れてしまうのではないかと思う。

集約拠点にインセンティブを与え、公共交通を確保し、周辺地にハードルを設ければ、人は集約拠点に移るかもしれないが、残念ながら日本人には土地に対する執着があり、特に高齢者ほどそれが高い。かといって、郊外に住み続けることが市全体のコストを高くしていることについて、市民がどう思うかについても問わねばならない。

そのあたりに矛盾があり、集約化だけをゴールにしてしまうと、郊外の人たちからは切り捨てられたと言われるだろう。一方で、ここをフォローすればコストが高くなる。集約化しても理想にはなかなか近づかないのではないか。

(委員)

コンパクト・エコシティの推進は、広報に尽きるという気がする。合意形成が重要である。

行政コストの比較だけを見ても、まちなかの行政コスト1人当たり910円が、郊外では5,245円に跳ね上がる。多くの人が郊外に住み続けると、近いうちに間違いなく市の財政は破綻する。そういう背景をしっかりと市から説明した上で、だからコンパクト・エコシティにしなければならぬという合意形成を図らないといけない。

もう1つは、まちづくりは、突き詰めると土地問題に行き着いてしまう。土地の所有権は基本的人権であり、コントロールすることはできない。市民の合意が得られないと、やろうとしても何もできないのが現実だと思う。

現状をしっかりと市から説明し、このまま放置すると何年か先には市の財政はパンクする

審議経過および審議結果

という説明があった上で、このまちの将来はどうあるべきかという議論に進んでいくべきである。

(委員)

コンパクト・エコシティを実現しようとした場合、どうしても合意形成という制約を超えなければならない。

どのように見せれば集約拠点が魅力的に見えて、そこに人を集められるかということ考えた場合、少なくとも10～20年先を考えると、1つは拠点に生業があるということであり、もう1つは安全ということが核になると思う。特に、高齢者、子ども、子育ての当事者、こういった人たちにとって安全な集約拠点づくりが必要であるが、果たしてまちなか以外の集約拠点到るのか。安全こそが、その地域の魅力である。

WHOが世界認証するまちづくりの基準として、セーフコミュニティというものがある。日本でも、京都の亀岡市、横浜市や厚木市が、これに向かって動いている。安全を実現するためには、拠点到再投資をしなければならないが、再投資、あるいは重点投資について、合意形成を図っていく必要がある。

(委員)

香川県では、優秀な子どもたちは、都会の良い大学、良い企業へ行き、県外で活動しなさいと言ってきたため、優秀な人材が残らなかった。大学とか教育機関などで、この地域にそういう若い人たちが生き残れるようなシステム、経済力の構築みたいなものを実施しているのだろうか。

(会長)

大学でも、Uターン、Iターンを含め、地域にどう人材を呼び戻すか、どう人材を確保するかということ議論している。生業を地域でどう活性化していくかが大変で、勤め先がないと、どうしても出ていかざるを得ない。ただし、香川県には魅力ある中小企業がたくさんある。そういうものづくり産業に、ぜひ若い人が行けたらいいと思う。

(委員)

数年前に、高松市と松山市の2つの都市を比較する調査をした。高校生が商店街とどの程度の関わりを持っているか、その地域に対する愛着、将来的にそこに住みたいか、Uターンして戻ってきたいか、その関係性を、アンケートデータを元に分析した結果、高校生は松山市の方が商店街に対して高い満足度を持っており、遊びの場所として使っていることがわかった。高松市も使っていることは使っているのだが、塾に通うなどの利用の仕方が多いという結果が得られた。そういったまちの機能に対する満足度は、その人の地元に対する愛着度にも影響を与え、結果的には地元就職したい、戻ってきたいという気持ちにも影響を与えるということがある。現時点で調査すると別の結果が出るかもしれないが、まちなかの機能というのは、特に若い世代に対して、ある程度インパクトを与えるという意味で、非常に重要な要素を持っているのではないかと思う。

特に若い世代にとっては、郊外に住むと安くて魅力的だから郊外に出ていくという意見があった。しかし、社会的な観点から見れば、決して安いわけではない。インフラの維持費用といった、都市全体にかかるコストを計算すれば、郊外に住むことは非常に高いコス

審議経過および審議結果

トをかけている。ただ、コストを直接負担しないため、郊外に住んでいる市民はそれを実感していない。コンパクト・エコシティは、社会的なコストを抑制しなければならないということであり、そのためには、サービスを受けている人がコストを負担するようなシステムを導入しないと、いくら集約拠点の魅力を高めても限界がある。

もう1つ重要なのは、自動車の利用規制である。国も責任を持ってやっていかなければいけない部分があるし、高松市も国に要請していく必要があるのではないかと思います。

最後にもう1つ、郊外の開発規制を行うとか、維持費用を上乗せするということは、実は中心部の住宅コストを上げるように働く。集約拠点に土地を持っている人は資産の価値が上がるかもしれないが、借りの側で非常に貧しい人は住みづらくなる可能性もあるので、その点の配慮をしっかりとしないと、結局、何のためのコンパクト・エコシティだったのかということになってしまう。

(委員)

大阪市内や神戸市内でマンション調査を実施した中で、人が増えているところは、必ずしも子どものいる世帯だけでなく、高齢者も増えており、年齢構成にあまり偏りが無いという印象を受けた。つまり、利便性を重視する世代があって、その利便性を享受するためにそこに住む、そういう一定のニーズがあるようだ。

子育て世代をたくさん集めると、また何年か後に高齢者の多いまちになる。集約拠点を作っていくときは、ある世代だけでなく、うまくソーシャルミックスしていく、様々な世代が入ってこられるような、そこでうまく循環するような仕組みを作る必要があるのではないか。高齢者、子どもと、あまり世代を分けて考えるのではなく、できるだけ複合して循環させていくような仕組みが重要である。

将来を考えると、そこで育つ子どもが地域に愛着を感じ、地域の空間づくりに子どもも参加していくことが大切だと思う。特に、学校は地域の交流拠点として大きな可能性を秘めている。

(委員)

私が住んでいるところは、数年前から農地の宅地化が進み、人口が急増しているが、元々の住民と新しい住民との間に絆は全くない。

今回の会議の中で、私としては、公共交通の充実、中心部と郊外を結ぶ循環的な交通網が必要ではないかと考えている。

(委員)

コンパクト・エコシティの重要性は理解できるが、今後2回目以降、どういう会議になり、どういうゴールになるのか分からないことが不安である。

(委員)

コンパクト・エコシティという市の構想が、どれほど市民に浸透できているのか、疑問に感じる。情報発信と市民の理解が必要と思う。

(委員)

都市計画マスタープランの策定時に、策定委員長として関わったが、当時、17の集約拠点については、5年くらいの周期で、もう少し絞り込んでいくという考え方が根底にあ

審議経過および審議結果

ったので、これも考慮して今後の議論をしてほしい。

(会長)

長期の計画であるので、現段階での集約拠点にこだわる必要はないということである。

(3) その他について

事務局より、委員に対して、本日、十分に述べられなかった意見等があれば、8月19日(金)までに意見書を提出すること、また、次回会議について、10月25日(火)午前10時の開催予定とすることを提案し、委員全員が了とした。

その他、委員から特に意見はなく、以上をもって、本日の会議を終了することとした。

以 上